





陸上自衛隊レンジャー部隊。

正式な特殊部隊を持たない陸自において、偵察・進入・破壊・扇動等の特務工作に従事出来る者を養成する課程を総称して『レンジャー部隊』と呼ばれている。

レンジャーという資格はあっても、それそのものを集結した部隊がある訳ではない。

隊員は全国から知力・体力・精神力に秀でた者が選抜され、過酷な訓練を経てレンジャーの資格を与えられるのだ。

常設部隊を持たないという点では現在の警察庁対テロ特殊部隊（S A T）と似ている。

いや、むしろS A T設立時に陸自レンジャーが参考にされたと言うべきであろう。

◇

1992年夏。伊豆半島某所。

その年の行軍は酷いものだった。

例年、半島突端近くの海岸から深夜に上陸し休息無しで道無き山中を踏破する恒例のレンジャー訓練は、この時ばかりは様子が違った。

幾度も来襲した大型台風の為、山中は獣道に至るまで土砂で埋まり、あるいは根こそぎ薙ぎ倒された倒木が延々と進路を塞いでいた。

毎年、訓練生を出迎えるアブや百足などの不快な昆虫群が姿を現さないのは有り難かったが、朦朧と歩く夜間行軍ではガレ場での転落や崩落の巻き添えで脱落者が続出していたのだ。

今も助教（教官の補佐役となる有レンジャー資格保持者）の4名が、つい20分ほど前に起きた事故で重傷を負った訓練生2名を担架に乗せ、麓の支援車両を目指し下山している最中であった。

「小休止！」

訓練生を率いる現在の部隊長、富士訓練学校の教官が後続に停止を告げた。

3名の男達…各々が迷彩塗料でメイクし迷彩服とジャングルブーツに身を固めた屈強の集団である…が、魂が抜けたようにその場へ座り込む。

灯火は無い。一切の灯りの使用は禁止されている。

それぞれが、ただ足下にある地面にへたり込み次の瞬間にはいびきをかき始めていた。

全員が消耗し尽くしていた。

ただ一人を除いて。

「貴様、なにを突っ立っておるかぁ！」

訓練教官がズカズカと歩み寄ると男の肩を乱暴に小突いた。

「小休止では腰を降ろせ！ 身体を休めるんだ！ さっさと座れっ！！」

「…」

「返事をせんかぁ！！」

男は、夜目にも光る二つの目で教官を睨んだ。

頬はこけ泥まみれの疲労し切った顔だったが、男の姿にはどこか人間離れした精気が漲っていた。

「なんだその反抗的な態度は？ いいたいことがあるなら言ってみろ！ 発言を許す！」

通常、訓練中には訓練生は一切の発言を許されない。

教官の命令には絶対服従であり、彼らに許される復誦はただひとつ「レンジャー！」の掛け声だけであった。

男…堀川三尉は直立不動のまま口を開いた。

「今次訓練の中止を進言します、教官殿」

「なんだとお？」

「十数名いた訓練生も現在、自分を含め残り僅か4名です。例年も脱落者は出ますが、この人数は異常です。第三状況（爆破工作）の遂行は不可能であります。下山するにも麓は遠い、助教官達がベースまで辿り着くにもどれだけかかるか… 残りの状況を破棄してこの山中を踏破、独力で下山するのが我が隊のとれる唯一の選択肢だと自分は考えます」

堀川は教官の顔を見ることもせず一気に喋り終えた。

「…」

教官は黙ったまま、ねっとりとした目で堀川の頭からつま先まで舐めまわした。

「おまえか。再訓練を志願したという物好きな奴は」

小馬鹿にした口調で教官が言った。

「で？ そのMOS（付加特技。訓練を完遂した者に与えられるレンジャー資格）さまは俺に『訓練をやめろ』と、そうおっしゃるワケですな」



「助教と離れベースの支援も期待出来ない今、我々は訓練生でなく遭難者だと申し上げているのです」

堀川は内心の怒りを毛ほども表さず淡々と意見を述べた。
だが教官は彼の言葉を一蹴してのけた。

「困難な状況を自力で打破する事こそ、この訓練の主眼である。いつもと様子が違う…そんな理由で中止出来る程生優しいものじゃない。貴様、目の前で仲間がバタバタ倒れて臆病風にでも吹かれたか？ 再訓練とは見上げた男だと思ったのは間違いだったようだ。このレンジャーの面汚しめっ！」

殴るように平手が堀川の横つらをはたいた。

「こちらの所在は本部がトレースしている筈だ。死んだ者は文句など言わん、遺体の収容など何時でも出来るわ。行軍は続行する、異議は認めん、判ったか！！」

有無を言わせぬ教官の口調に、動かぬ堀川の表情が一変した。
額に血管がゴコリと浮き上がる。

「教官殿は、たかが訓練であたら優秀な人材を危険に晒すつもりですか！？ この状況は遭難だと言っているんです。我々は要救助者なんです！ 悠長に兵隊ゴッコなどしている場合では無いというのが判らないんですか」
「兵隊ゴッコだとお、きさまあ〜！！」

教官が、今度は拳を固め堀川の頬げたを思い切り殴りつけたが、彼は僅かに首を傾げただけで一撃を受けてみせた。

「上官不服従、命令違反、訓練放棄で隊内規定違反だぞっ！ いや、貴様のような根性の腐った奴はこの場で俺が殴り殺してくれる！！」

なおも教官は鉄拳を振るおうとした。
あるいはこの状況下で、彼もある種のパニック状態に置かれていたのかも知れない。

三步の距離をひらりと退がり、堀川は教官に言った。

「少し頭を冷やしてください。ほかの連中を見てください、私の原隊の部下もいますので」

漆黒の闇の中、足下の不確かな山の斜面を堀川は音も無く駆け下っていった。

後には拳を振り挙げた教官が立ち尽くすだけだった。

mission : 3



「小隊長」

爆睡からいち早く目覚めていた最年少隊員、杉山三曹が戻ってきた堀川に不安げな声を掛けた。
彼は堀川の隊から訓練に参加した一人だった。

「5分経ったら皆を起こせ。独自行動をとるかも知れん。状況を放棄し下山しようと思う、教官の同意は期待薄だがな」

「しかし、いいんですか？ そんな事して」

真っ暗闇でも、慣れた目には杉山の困惑した表情が見てとれた。
まして堀川は人一倍、暗視能力に長けていた。

「過去、レンジャー訓練で殉職者が出た例もある。俺は二度目の参加だが今回の状況はあまりにも異常だ。中止が妥当だと思う。だがな…教官は正常な判断力を喪っている、あの男はまだ続ける気でのいるのだ。これはもう訓練じゃない。心配するな、責任は俺がとる」

闇の中、堀川はニッコリと笑ってみせた。

「判りました。5分後ですね、準備しておきます」

若い杉山は堀川の言葉を素直に信じた。
装備を纏め、ブーツの紐を締め直し始める。

それでいい
しっかり頼むぞ

堀川はルートを探る為その場を後にした。
場合によっては教官は置き去りにするしかないと思いながら。

◇

喚声を耳にしたのは、杉山に告げた5分も経たないうちだった。
絶叫。何かを切り裂く音。そして濃い血の臭い。

急いで小休止の場に戻った堀川の目に飛び込んできたのは、血まみれで倒れている杉山三曹の無惨な姿と、山刀を手に突っ立ったまま訓練生達を呆然と睨みつける教官の姿だった。

「オレが悪いんじゃない…逃げようとしやがった…止めようとしたら…許さんぞ…だから…へへ…」

ブツブツと呟きながら、教官はゆっくりと堀川を見た。
その目に狂った光が灯っていた。

う…

うおおおおおおお！！！！！！

堀川は叫びながら突進していた。

狂気の笑いを浮かべた教官に瞬時にすり寄ると右の掌を肋に叩きつけ、折った肋骨を臓器まで力任せに押し込んだ。
肺を貫かれた教官が口から血飛沫を吹き出した。

mission : 4



振り向きざま教官から山刀をもぎ取ると、ズシリとした感触を手に感じながら堀川は言い捨てた。

「貴様…死ね…」

右腕が
左手首が
右足が

山刀が一閃二閃し教官の身体が飛び散った。
どうと地に倒れ、残った左腕で必死に身体を起こした教官の目は、恐怖と狂気がないまぜになっていた。

ひ、ひゃあはははあ～！

悲鳴のような叫びのような教官の奇声を、堀川の最後のひと振りが首ごと切り飛ばす。
血が逆さシャワーのように吹き出し、残された訓練生の頭上に振りそそいだ。

堀川は倒れている杉山を抱きおこし顔を拭った。

「しょう…たいちよ…う…」
「喋るな。すぐ病院へ連れてってやる」
「ハハ…ここ山んなか…ですよ…ね…」

笑ったきり彼は動かなくなった。

少しの間、その身体を揺さぶっていた堀川は、やがて声をあげ泣き始めた。

それが、彼の流した最後の涙であった。

◇

風も冷たくなり始めた、その年の秋。

やる事もなくブラブラと無為の日々を過ごしていた堀川に声を掛けた者がいた。

「警備…会社？」

「ええ。今度の国会で治安維持特別法案が提起される見込みです。警察機構の一部が近い将来、民間に委託されるんですよ。我が社はビジネスチャンスとして治安業務に参入しようと考えているのです」

「それで、俺に何の用だ」

「我々には凶悪な犯罪に対処するノウハウが無い。貴方のような方の力が是非とも必要なのです」

「…殺人者だぜ、俺は」

「裁判はきわどいところで正当防衛が認められそうじゃないですか。問題はないでしょう」

凄みのある顔の傷に似合わぬ穏やかな口調でその男、沼田は彼に話し続けた。

「貴方を知る方は皆、貴方は変わったと口を揃えて言っていました。私は目覚めたのだと思います」

「目覚めた？」

堀川は驚いた。

ネガティブな言葉を吐く者には腐る程会ったが、こんな事を言う男は初めてだった。

「狩人の本能、と言うべきでしょうか。陸自は貴方には狭過ぎます。我々のオファーを引き受けてくれれば、そこには貴方好みの日々が確実にありますよ。社会の常識や道徳など通用しない獣のような連中との楽しい鬼ごっこが。お約束します」

醜い傷跡を歪め、沼田はニヤリと笑った。

The last mission



成程…全てお見通しという訳か…

「考えてさせてくれ。相談してくる」

「相談、ですか。貴方が」

「そうだ。必要なんだ、こんな時だからこそ」

「…判りました。どのみち法案の成立までにはまだ色々と紆余曲折がありそうですし、気長に返事をお待ちしていますよ。では」

名刺を置いて立ち去る間際、沼田はボソリと一言だけ言い添えた。
多分、貴方の方が我々を必要としてくるでしょうね、と。

◇

週末、堀川は車を飛ばして伊豆半島の突端、石廊岬へと向かった。

あの日、この辺りから上陸作戦を決行した思い出の場所…

人影も無い岬の駐車場に車を止めると、トランクから大きなケースを引っ張りだし、肩にかけて斜面を登り始めた。やがて海が見えてくる。

観光客向けに立てられた鐘の側までくると、彼はケースから楽器を取り出した。

コントラバス

高校生の頃、その音色に魅せられて散々弾いた愛器を足下に置くと、彼は眼下の景色へ聞かせるかのようにゆっくりと弾き始めた。

低くうねるような弦の音が、潮風に混じって虚空に消えてゆく。

「杉山… 俺はあの時たぶん笑っていた。教官の奴を喜んで殺した。お前を殺された怒りは、人ひとり好き勝手に切り刻める理由を得た歓喜の前では蝋燭の火のように儚かった。俺は…俺には、部隊を率いる資格は無い。部下の命を預かる力も無い。俺はただ戦いたいだけだったんだ、殺るか殺られるかの狭間に本物の血が流れる場所で。そんな自分をあの時、知ってしまったんだよ。なあ…許してくれるか、杉山…」

何時までも飽く事無くコントラバスを弾き続ける堀川の頭上を鳥影が舞う。

カモメでも鳶でもなかった。

まばらな群を為した黒い羽の集団が、何処かへ向かい飛び去ってゆく。

水平線の端に、ひどく赤い太陽が触れようとしていた。